
桜の散る世界

湯 壱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の散る世界

【Nコード】

N4709BA

【作者名】

湯雫

【あらすじ】

崩壊した世界を走る少年少女の話。

prologue

桜の下には死体が埋まっている。

何処で聞き覚えたのかはつきりしないが、誰でも一度は聞いたことがあるだろう有名な言葉。

もちろん本当に死体が埋まっているわけではない。昔の小説家が、咲き誇る桜の美しさを表現するために使った言葉らしい。繰り返すが、本当に死体が埋まっているわけではないのだ。
ないの、だが

それならば、この光景は何なのだろう。

階段の踊り場から見えるマンションの前庭。駐輪スペースとわずかばかりの緑が植えられた小さな空間。

そこにひとりの男性が立ち尽くしていた。

一言で表すなら何処にでもいるごく普通のサラリーマンだ。

グレーのスーツにおとなしい色合いのネクタイ、そして年期の入った革靴。

ただ、その様子は尋常ではなかった。

着ているスーツは薄汚れ、所々が破れており、下に着込んだシャツには赤黒い染みがいたるところに広がっている。

土気色の肌には生気がなく、五本あるはずの手の指は3本にまで減っていた。

そして極めつけは……顔の左半分の肉がなにかに噛み千切られたようになくなっているのだ。

ははは……朝から冗談がきつい。これではまるでホラー映画に出て

くるゾンビそのものだ。

男性の頭上には咲き誇る満開の桜の花。鮮やかに色をつけた桃色の花は風が吹くたびに一枚、また一枚と花弁を落とし、男性の足元に広がる赤い血溜まりに小さな波紋をつけた。

強烈な血臭と腐敗臭に満たされた空間に時折、甘い花の香りが混じる。

「アアアア……」

男性が小さな唸り声を上げた。

その声に呼応するかのように物陰からゆったりとした動作でひとり、ふたりと男性の同類が姿を現す。

そして5分もしないうちにマンションの小さな前庭は男性と同じものでいっぱいになった。

もう笑うしかない。

たった一日。そう、たった一日の空白の間にすべてが変わってしまった。

これではまるで御伽噺の浦島太郎だ。冗談にも程がある。

ふいにどこかでガラスが割れる音が響き、直後に甲高い女性の叫び声が辺りに轟いた。

助けを求める必死の叫び。その声を聞いても両脚は動いてはくれない。ただその場で立ち竦み、小刻みに震えるだけだ。

夢なら覚めて欲しい。すぐる様にして見上げた空は雲ひとつない青空だった。

どこまでも澄み渡った綺麗な青。そこから降り注ぐ暖かで柔らかな日差しは、地上にあるものすべてを優しく照らしている。

新緑の若葉、黒ずんだ血だまり、華やかな桜の花、動く死体と動かない死体。

みんなは大丈夫だろうか。

友人、知人、家族。それぞれの顔が脳裏に浮かんでは消えていく。

……そうだ。こんな所で震えている場合ではない。今この瞬間にも誰かが生きて助けを求めているかもしれないのだ。

自分を勇気付けるように手にしたプラスチック製の物干し竿をぎゅっと握る。

大きく息を吸い、最後の覚悟を決めると、眼前に広がる幻想的で地獄のような世界へ一步を踏み出した。

1 day - 1

「今日も関東地方は高気圧に覆われて快晴。降水確率は午前、午後共に0パーセントです。この天気は明日も……」

微かにコーヒーの匂いが漂う、忙しくもゆったりとした朝の時間。テレビから流れるのはいつもと同じニュース番組。

「さて、気になる今年の花粉の飛散状況ですが、気象庁の発表によると例年並と予想されており……」

花粉、か。

幸いにして俺には縁のない代物だけど、クラスメイトや知人の中には毎年、これにやられてマスク着用を強制されるやつが何人かいる。ある意味風物詩のようなものだが、当事者にとっては辛い以外の何者でもないのだろう。

ピッピッ、ピッピッ

ふいに鳴った規則的な電子音にわれに返った。

眺めていたテレビから目を離し、手にしていたリモコンをソファーに投げ出すと、はだけたままになっていた胸元へと手を入れる。

「……これは本格的に駄目っばいな」

取り出したばかりのデジタル式体温計を眺めて溜息をひとつ。

胸元の開いたシャツをそのままにずるとソファーに倒れこんだ。寝起きからなんとなくだるさを感じていたので念のために計ったらこれだ。まいったな、なんだか頭がくらくらしてきた。

「亮太、どうだった？」

パタパタとスリッパの音を響かせて姉の陽菜が居間に入って来た。深いえんじ色のブレザーにチエツクのスカートという学生服に身を包み、胸元には淡い色のリボンが小さく結ばれている。

歩くたびに腰まである長い髪が朝の陽光を浴びてつやつやと輝いていた。

「アウト、かな」

諦めの混じった言葉と共に手に持っていた体温計を差し出す。

「37.8分。これはアウトだね」

形のよい眉をわずかに伏せてそう呟く陽菜姉。しばらくの間、難しそうに顔をして体温計を見ていたが、唐突に空いていた左手を俺のおでこに向けてすつと伸ばした。

触れた手の平からほんのりとした暖かさが伝わってくる。

「うーん、やっぱり熱っぽいかな。……よし、学校はお休みにしよう。担任の先生には私から伝えておくから」

陽菜姉は体温計の電源をoffにして微笑む。陽菜姉のこの「もう決めました」という表情で放たれた言葉は今まで一度も覆った事がない。ほわっとした外見とは反して意外と我が強いところがあるのだ。

まあ今回に限れば、体もだるいしお墨付きで休めるのだから文句はないのだけど。

1 day - 2

「でも、なんで新学期が始まって早々に風邪を引いたんだろうなあ。特に何かをした覚えもないんだけど」

熱を測る前は何となく調子が悪い、そんな程度の認識だったのだが、こうして具体的な数字を示されるとぐつと体調が悪くなったように感じる。病は気からというが人間って不思議だ。

「季節の変わり目だから体調を崩しやすいんじゃないかな。うちのクラスにも風邪で休んでる子いるし。今日は一日ゆっくりしてるといいよ。それから食欲はなくても何か食べること。あ、おかゆ作っておこうか？」

「いや、大丈夫だって。少し熱っばいだけで喉が痛いわけじゃないから普通に食べられるよ。それにおかゆなんて作ってる時間ないだろ？もう8時近いぞ」

俺と陽菜姉の通っている高校は家から歩いて20分程度とわりと近場にあるため、比較的朝はゆっくりと過ごす事が出来る。

簡単なお粥の一品くらいなら出来るかもしれないが、時間的にはぎりぎりだろう。

走っていけば間に合うかもしれないが、さすがにそこまでさせるのは気が引けた。

「じゃあ私は行くけど、ゲームとかしないでちゃんと寝てないと駄目だよ。具合が悪かったり困った事があつたらいつでも連絡する事、いい？」

「ん、わかった。大人しくしてるからもう行ったほうがいいぞ。生徒会副会長様が遅刻なんて格好悪いし」

軽口を叩いて陽菜姉を送り出す。陽菜姉はまだ何か言いたそうだったが、本当に遅刻されてはこちらが困る。

相変わらずお節介焼きというか過保護な姉だ。

お互い高校生になり、それぞれの時間を過ごす事が多くなったというのに、こういうところは昔のままなのだから。陽菜姉の中では俺はまだまだ手のかかる子供に見えているのかもしれない。

「さて、と」

体に若干の違和感を感じつつ、気だるげな足取りでリビングへと戻る。

テーブルには食べかけのトースト、ベーコンエッグに輪切りにしたグレープフルーツ、そしてすっかり温くなったモーニングコーヒーがのっていた。

「どうしたものかな」

はつきりいつて食欲はない。でも食べないと薬が飲めない。風邪を引いた時に陥るいつものジレンマだ。

少しだけ手をつけて薬を飲むという選択肢もあるのだが、どうしても食べ物を残す、最終的には捨てるという行為は好きになれない。

とりあえずトーストを手にとって見る。

自分の歯型がついたトースト。塗ったマーガリンが染み込んでふにやふにやになっている。

あー。

心の中で毒づいてみるがふやけたトーストは元には戻らない。
もう一度焼きなおそうかな。そんなことを考えていると

「今日の運勢、カウントダウン！」

テレビから聞こえたハイテンションな声に意識を奪われた。

画面の中には流れるたくさんの星をバックに「今日の星座占い」の
タイトルロゴが映し出されている。

朝のテレビにはかかせないコーナーであり、出かけ前の貴重な時間
を容赦なく奪っていく罪深い奴の登場だ。

「4月も中旬に差し掛かり、新しい生活に馴れ始めた方も多いので
はないでしょうか。仕事に学業、恋愛といろいろと忙しい季節です
が、そんなあなたの運勢はどうでしょう？さあ、今日も張り切って
スタートです！」

特に興味があるわけではないのに、この手のコーナーってついつい
見てしまうんだよねあ。

あ、陽菜姉のふたご座は7位か。健康運は5つ星、でも忘れ物に注
意。ああ見えて抜けているところもあるから弁当とか忘れていつて
たりして。

その後も次々と「運のいい星座」が発表されていく。

占いなんて信じてるわけではないが、自分の星座が上位にあった時
は「今日はいいことあるかも」と思うし、反対に低かった時はなぜ
か少し落ち込んだ気分になる。

そして

「今日の運勢が残念な星座は……ごめんなさい、おひつじ座のあなた」

……俺の星座ですか。

「健康、金銭運とにもよくない一日です。大切なものを無くしそう。体調も悪くなりがちなので風邪などには気をつけてくださいね。ラッキーカラーはブルー。ラッキーアイテムは白いもの」

風邪に注意、か。ちょっと情報が遅かったな。せめて昨日言っただけじゃなかったよ。

だいたいラッキーカラーが青でラッキーアイテムが白いものって何だよ、明らかに矛盾してるだろ。ブルーベリージャムをいれた牛乳でも飲めっていうのか。

テレビ画面に写っているしょんぼりした様子の羊のキャラクターを眺めながら、そんなことを考えつつ、ふやけたトーストを一口かじった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4709ba/>

桜の散る世界

2012年1月12日22時57分発行